

## 別府大学アーカイブズ・センター —大学アーカイブズの役割とは?—

### 1 はじめに

別府大学は大分県別府市にある私立大学である。平成21年度より大規模な改組が予定されているが、平成20年度現在、文学部(英文学科・国文学科・史学科・芸術文化学科・人間関係学科・文化財学科)、食物栄養学部(食物栄養学科・バイオ学科)よりなっている。学生数およそ2200人の中規模大学である。改組により文学部の学科の統廃合と、バイオ学科の改称、国際経営学部の新設などが予定されている。

別府大学アーカイブズ・センター(以下「センター」という。)は、平成18年度に設置された。業務としては、

- (1)大学関係のアーカイブズの収集、整理、保管、利用管理。
- (2)大分県を中心とした、地域アーカイブズの収集、整理、保管、閲覧公開。
- (3)地域や大学史資料の展示、公開講座などの社会教育活動。
- (4)文書館専門職(アーキビスト)養成課程の実習。
- (5)その他必要と認められる活動。

の5つをうたっている。ただし、今のところ、順次活動を拡大してはいるが、上記のうち、(2)(3)(4)が中心である。(1)についてはちょうど大学史編纂事業である大学120年史の刊行が一段落となり、その資料整理を行っている状況であり、法人文書や大学事務文書の保存管理体制の整備はまだこれからの課題である。学科の統廃合が予定されている現在、ちょうど自治体合併と同じ問題が発生しているわけであり、学内文書散逸の危険への緊急な対応が要請されている。



別府大学アーカイブズ・センター入り口付近

### 2 設置の経緯

センター設置は、先に挙げた業務の(4)文書館専門職養成課程(以下「課程」という。)の実習教場としての役割が直接の契機となっている。課程は平成16年度に設置した。学部学生を対象に、文書館専門職に必要な基礎教育を施すためのものである。その後1期生の卒業にあわせて、平成20年度に、より専門教育を施すための大学院課程を置いている(ただし歴史学専攻の1分野)。行論上、必要最小限で課程を説明すると、現行課程のカリキュラムは、

- |                  |     |
|------------------|-----|
| 1年次「市民生活とアーカイブズ」 | 2単位 |
| 2年次「アーカイブズ論」Ⅰ、Ⅱ  | 4単位 |
| 「行政法」            | 2単位 |
| 3年次「アーカイブズ実習」Ⅰ、Ⅱ | 2単位 |
| ほかに2～4年次に記録史料科目  | 8単位 |

というものである。ただし平成21年度改組にあわせて、今後6単位の科目を増設する予定である(管理論とデジタルに関する科目)。

平成16年度設置の課程ということは、上記のカリキュラムを参照すれば、学年進行で平成18年度に「アーカイブズ実習」を開講しなければならないということだった。

当時、日本国内の大学および大学院でアーカイブズ関係の課程を設けているところは皆無であった(現在は学習院大学大学院に設置されている)。もちろん全史料協の専門職問題委員会などで大学でのアーカイブズ教育についての検討がなされていたことは知っている。別府大学の課程は平成15年度に設計した

ものであるが、こうした検討を充分に取り入れたものとは言い難いものであった。課程設置主体は文学部史学科である。発想は歴史学の範囲にしかなく、当初は行政法も含まれず、アーカイブズ管理論系の講義の設置も含まれていなかった。平成15年度に急遽設置を図った背景には、課程の設置は充分検討した長年の計画ではなく、とある九州の自治体公文書館関係者(別府大学卒業生)が、アーカイブズ教育の重要性を熱心に大学に訴えかけ、それが奏功したと聞いている。実は著者は平成16年度に別府大学に赴任したため、この辺の経緯はごく間接的に知るのみである。

課程にとって「アーカイブズ実習」は非常に重要な根幹となるものであった。平成17年度はこの準備にかなりの労力をそそぎ、周辺の公立公文書館をいくつか尋ねて交渉した。さいわい大分県公文書館に30名の課程定員を受け容れて頂いた。現在も実習を受け容れていただいている。しかし多数の学生の長期間の受け容れは最初から困難であり、せいぜい1学生あたり1~2日である。それでも学生数が多いため、県公文書館には多大の迷惑を掛けてしまっている。そこで当初より、学生が十分に文書を扱える教場が必要と痛感された。そのため、細い経緯は省略するが、別府大学附属博物館のうち、古文書を担当する部局を中核にして、アーカイブズ・センターを設置することとなったのである。

センターでの実習に用いる教材であるが、幸か不幸か、明治期の市の行政文書などをごく僅かながら所蔵している。流出したものを購入した文書である。あとは大分県公文書館での実習に用いる教材(大正期・昭和期の県行政文書の写真など)を事前事後教育に利用するなどして、江戸時代の古文書や民間史料だけでない教材を何とか調達している。

### 3 地域アーカイブズの整理

これまでの経緯で、センターの収蔵資料の基礎が附属博物館旧蔵の古文書類であることは、察せられたことと思う。大半は近世から

近代までの民間史料である。日田や国東地方など、大学所在地よりやや離れた古文書の方が多い。すでに整理されたものもあり、未整理のものもある。すこし問題なのは、博物館的整理がなされてしまっていることである。実習の教場としては、民間史料の現状記録の実習を行うために、保存されていた現況を保った未整理文書が常に一定度あってほしい、という状況が発生する。現在は県北部の近世から近代までの庄屋文書を預かり、実習をしながら整理している。変な話であるが、整理が進みすぎると、翌年の実習に困るので、意図的に現状記録だけ後回しにすることになるし、実はそろそろ別の文書群の寄託(正確には使用貸借)を探さねばならないと考えている。この辺の事情は普通の公文書館や史料保存機関では考えられないことであろう。

整理は、実習として学部学生が行っている(これは教育重視のため、そのまま使えるものが少なく、あまり進捗しない。)一方、大学院生と学生によるアルバイトがあたっている。後者の学生らは「近世近代史研究室」に所属している学生が中心で、これは一種のサブゼミにあたるものである。また別の史料所蔵機関(他県)で整理業務(嘱託)にあたっている、大学院卒業生の有志が、泊まりがけで整理に参加してくれている。仮に予算があっても、実際に文書が読めて整理できる人手が足りないというのが、まわりに大学院生が十分に存在しない地方大学の悩みである。

以上は民間史料の整理であるが、おそらく他県にあまり類のない、大分固有の地域アーカイブズの整理にも着手したところである。「南蛮史料アーカイブズ」プロジェクトと仮称している。大分県臼杵市立臼杵図書館には、ポルトガル政府などから寄贈された、アジェダ図書館、エヴォラ図書館などの16世紀の文書のマイクロフィルムがある。これはポルトガル大統領が臼杵を訪れたことが契機で同市に贈られたものであるが、日本に関係すると思われるフォンドのシリーズ単位でのフィルムのように、日本に関係しないものも大量に

含まれていると思われる。同市は保存管理していたものの、活用するにはアカデミズムの支援が不可欠であった。これも経緯を省略するが、センターの1事業として、他大学の教員も加えた整理活用のプロジェクトを始めたところである。これも地域にある大学アーカイブズがやるべき地域アーカイブズではないか、と思っている。

#### 4 社会教育活動

社会教育活動は、展示を除くと、公開講座と、大分県立生涯教育センターと共催事業の研修講座、大分県公文書館・大分県先哲史料館との3館共催事業の研修講座の3講座が、今のところ主たるものである。

公開講座は、前述した「市民生活とアーカイブズ」の科目を一般市民にも公開しているものである。同科目は1年生から履修可能な共通科目であるが、大分県公文書館、大分県先哲史料館、大分市歴史資料館、天草アーカイブズ、洪沢栄一記念財団、NPO法人（大分県公文書館の整理事業をサポートしている。）などより講師を招き、本学教員も加わったメドレー授業である。ただし平成21年度以降は改編も検討している。一部2年次授業に移し、もっと企業アーカイブズ関連を増やしたいと思っている。大学アーカイブズは教育機関を補完する機能もあるので、卒業生に役立つであろう、さまざまな要素をもっと取り入れることが求められている。

大分県立生涯教育センターと共催事業の研修講座は「デジタルアーカイブズ」を主題とし、県内市町村職員、教育機関教員を対象とした研修講座で、全2日間の集中講座である。教員2名があたり、アーカイブズのデジタル問題の講義と、デジタルアーカイビングの実習を行っている。参加者は学校教員も多く、とくに統廃合で廃校となる県立高校などでは、デジタルでのアーカイビングをまず考えるようである。アーカイブズとはデジタルのことだと理解している参加者も多いが、この機会に本来のアーカイブズを理解してもらっ

た上で、デジタルの活用をはかってもらおうという、啓発活動ではあるが、こちらとしても現場の実態と問題を知ることのできる貴重な機会となっている。

大分県公文書館・大分県先哲史料館との3館共催事業の研修講座は、平成19年度から始めたものである。平成19年度は、天草アーカイブズより講師を招き、別府大学の文化財修復を専門とする別府大学教員も講師となり、水害にあった文書の応急処置と危機管理体制の構築をテーマとした。対象は大分県内の市町村の首長部局の職員、教育委員会など文化財政部門の職員、別府大学の大学院生・学生の希望者、それに公文書館や先哲史料館などのサポートにあたっている市民などである。平成20年度は、広島県立文書館より講師を招いて、県内連絡協議会などのネットワークの構築をテーマとした。

この研修講座は単なる啓発活動ではなく、具体的なネットワークの中核になることが期待されている。行政部門を主とする公文書館と、古文書を主とする先哲史料館の2つのアーカイブズがあることも大分県の特殊事情であるが、大学アーカイブズがどのようにそれに加わって協力体制を作っていくかという点も特殊事情として重視していきたいと思っている。大分県は市町村立の公文書館はまだない。やがて設立されてゆくと信じているが、その間、地域アーカイブズの保存をはかることもひとつの責務ではないかと思う。これは前述の実習の教場として、民間史料整理を常に続けていくということと、うまく整合するのではないかとと思われるのである。

紙面もつきたので、ここで擱筆したいが、今後の課題は冒頭にも触れたように、大学組織自体の文書管理・保存体制の整備である。この機能がないと、アーカイブズと呼ぶことはできないと深く感じている。

〔別府大学アーカイブズ・センター 針谷武志〕